

バングラデシュ研究——時代の変化とツールの変化

高田峰夫

●はじめに

思い出話めくが、あるエピソードを記すことから始めたい。一九八八年春のことであった。青年海外協力隊の選考試験に受かり、バングラデシュへ派遣されることが決まった。語学訓練を開始する直前になり、当時のバングラデシュ研究の第一人者であり、選考委員でもあった原忠彦先生（故人）のお宅に伺うように、と協力隊の事務局から連絡があった。面接会場で会った以外に面識がなかったので、少々緊張して出かけていくと、派遣前にバングラデシュについてレクチャーしておきたい、とのこと。それから三日間か四日間（記憶が曖昧）、朝から晩まで、同じアカデミーへ派遣予定のもう一人と二人だけ、大学院の集中講義も顔色を失うほど徹底的な講義を受けた。その中で先生がバングラデシュでの資料収集について興味深い話をされたのである。ダッカでは本を入手できる場所が限られている。研究書はニュー・マーケットという市場の一角にある書店街以外ではほとんど入手できない。ただし、シヨナルガオン・

ホテルとシエラトン・ホテルという同国の高級ホテル内の小さい書店には一定の品揃えがある。研究報告書は、BIDS (Bangladesh Institute of Development Studies) に行けば、それなりのものが手に入る、等であった。

あれから約二〇年。「二〇年一昔」とすれば、「二昔」も前の話である。その間にどのような変化があったのか。時間の経過を追いつつ、ざっと振り返ってみたい。

●一九九〇年代半ばまで

バングラデシュの首都ダッカに初めて足を踏み入れたのは、一九八八年の七月だった。まだ習いたてのベンガル語がおぼつかなかったが、現地での語学訓練期間中、本を求めてニュー・マーケットへ出かけた。確かに書店が多数並んでいたが、大部分はベンガル語の本や小中高等学校の教科書・ガイド本を売る店で、英語の本を揃えている店は思ったよりも少なく、社会科学関係の研究書を備えているのはわずかに数軒だった。しかも、品揃えは実に貧弱。それ以前に訪れたことがあるインドの書店と比べ

ると何とも情けないほどだった。ともあれ、店頭の基本文献とされていたものが何冊かあったので、購入した。しばらくして知るのだが、書店の状況は当時のバングラデシュの出版事情を反映したものであった。つまり、社会科学関係の英文研究書の需要が少なかつたのであり、ましてやそれを自分で購入して読む人など稀だったのだ。そうした中でも、当時、品揃えでやや充実していたのは Book Stallmate だった。以後二年間のバングラデシュ滞在中、この書店にはダッカに出てくるたびに出向いた。

こうなると気になるのが高級ホテルの書店である。次に二軒の高級ホテルを順次回った。いずれもホテル内の小さな売店で、書店と言うことさえはばかられる規模だったが、確かに品揃えは悪くない。まさに原先生のおっしゃった通りである。実は、ここに当時のバングラデシュの特殊事情が反映されていた。まだ半軍政下にあつて経済活動は活発とは言えず、また同国には観光地と呼べるようなものは皆無に等しい。他方、世界の最貧国の一つとされていたため、「援助の実験場」と呼ばれたほど多数の開

発援助プロジェクトがあった。それゆえ、海外からやってくるのは援助関係者や国際機関関係者がほとんどで、研究者も大部分が援助がらみだったのだ。それらの人は数も少なく、彼らが泊まれる宿泊施設は限られていたから、多くは件の高級ホテルに宿泊する。彼らは短期間の滞在中に効率良く仕事を片付けようとするから、仕事（主に開発援助）関連の基礎資料・文献も手近な所で入手しようとする。需要があるところに供給があるとは経済の基本であり、研究書の場合もその例外ではなかったのだ。もちろん、私もこれらの店舗で若干の書籍を購入した。こうして私のバングラデシユ研究が始まることになった。

私が派遣された先は、同国東部のコミラ市郊外に位置する「バングラデシユ農村開発アカデミー」(Bangladesh Academy for Rural Development = BARRD)。¹⁾このアカデミーは、一九六〇年代(旧パキスタン時代)に農村開発の一大成功例とされた組合方式、いわゆる「コミラ・モデル」を生み出したので有名であった。しかし、それも昔の話。私が赴任した頃には完全に寂れていた。理由は明らかである。アカデミー周辺にあった「成功」事例は、都市近郊の比較的優良な場所にモデル村を選び、そこに豊富なアメリカの資金と人材とを集中的に投入して作り上げたものである。その「モデル」を周辺の村が真似しようとしても難しく、いわんや土地条件のもっと厳しい地

域ではそもそも真似ることなど不可能に近かったのだ。一九七一年のバングラデシユ独立の直前、アメリカはバングラデシユ援助から手を引き、アカデミーからもアメリカの研究者たちと資金とが去っていった。残ったのは「コミラ・モデル」という空虚なモデルと過去の名声だけだった。

こうした事情を反映して、アカデミーの図書館は非常に興味深い状態を見せていた。一九五〇年代から一九六〇年代末までの時期に限れば、社会科学の広範な分野で一通りの基本文献が揃い、特に農村開発関連分野の資料は充実していた。ところが、ほぼ一九七〇年を境にして文献数は極端に少なくなり、海外の文献は数えるほどになっていったのだ。図書館に併設の売店でも並べているのは「成功した」コミラ・モデル関連のもの的大部分。また、資金が不足していたためもあり、「アカデミー」の名とは裏腹に、研究自体も低調だった。

この時期までのバングラデシユ研究を考えると、書誌として最も優れているのは、*Willen Van SCENDEL, Bangladesh: A Bibliography with Special Reference to the Peasantry* (Afdeling Zuid- en Oost-Azië Anthropologisch-Sociologisch Centrum, Universiteit van Amsterdam, Amsterdam, 1976) だろう。バングラデシユ(旧ベンガル、旧東パキスタン)に関する欧文文献を、英領期から一九七〇年代中期まで、ほぼ網羅的に集めたものである。この本を参考にして、その後アカ

デミーの図書館をはじめとするあちこちの図書館を回り、気になる文献の多くをコピーで入手した。この資料調査をベースに独自の調査をまとめた同じ著者の *Peasant Mobility: The Odds of Life in Rural Bangladesh* (Van Gorcum, Assen, 1981) は、前掲文献に比べると入手が容易で、書誌情報は農村研究に特化している。

コミラ赴任後も時間が許せばダッカに向き、研究機関の図書館を回った。同国随一のダッカ大学でも図書館は大したことがないとの事前情報だったが、念のため出向いてみて、実際にさほど役に立たないことを確認した。原先生お勧めの BIDS にも行った。図書館は閉架式で、カードの不備もあり、使いやすさとは言えなかったが、援助や開発関連の書籍・報告書の類は一通り揃っていたので、所用でダッカに出てきた際には、ときどき立ち寄ることにした。また、同研究所は多数の調査研究を実施し、結果を報告書として刊行・販売していた。大部分はマクロな調査や大まかなサンプル調査で、さほど興味を惹かれなかったが、中には参考になるものもあった。そのうち *Abiq RAHMAN, Simeen MAHMUD, Thina HAQUE* の三名によるサーヴェイ、*A Critical Review of the Poverty Situation in Bangladesh in the Eighties, Vol.1* (BIDS, 1988) が刊行された。研究報告書だが、同国の貧困に焦点を絞った書誌としても全体の俯瞰には役立つ。さらに International Centre



バンガラ・アカデミーの本市。年に一度開かれるバンガラデシュ最大規模の本祭り（1989年2月27日、筆者撮影）

for Diarrhoeal Disease Research, Bangladesh) には小ぢんまりとした図書館が併設されていて、病理学や疫学関係ばかりでなく、社会科学関連の文献もあった。ただし、組織の性格上、セレクションが偏回しているのはやむを得ないだろう。BIDS同様、ここでも蔵書よりは出版物の方に利用価値が高いものがあつたように思う。

さて、残念ながら、図書館として見るべきものはこれで終わりだった。「公文書館」は専らベンガル語の古い資料ばかり。また、今でこそ多少きれいになったが、当時の「バンガラデシュ・アジア協会」の図書館は古色蒼然としていて、あまり使い物にならなかった。援助関連中心だが回国では多数の英語による報告書が出ていた。しかし、市販品ではないため、それらをまとめて見ることが出来る場所はどこにもなかった。仕方なく、あちこち人のツテを辿り、所持している人に貸してもらったりしたもの、それにも限りがある。結局、文献名が分かっているといえ、ついに見ることができなかった資料はいくつもある。

帰国直前になり Shapan ADNAN Annodation of Village Studies in Bangladesh and West Bengal: A review of socio-economic trends over 1942-88 (BARJ) が出版された。これはバンガラデシュと西ベンガルに関する村落研究のサーヴェイだったが、取り上げられた研究の選択がかなり恣意的で、しかも注釈中の評価には首を傾げる部分もあ

った。

（なお今回、ベンガル語文献については、あえて言及をしていない。）

●一九九〇年代半ばから現在まで

一九九〇年末で軍政・半軍政の時代も終わり、一九九一年からバンガラデシュでは民主政治が回復された。また、グローバル化の潮流に合わせるように、バンガラデシュでも経済自由化が追求されるようになった。これらがあいまって、一九九〇年代半ばから目に見えて経済が活況を呈すようになり、それと平行して出版業界も盛況になった。具体的には、ベンガル語・英語共に出版点数が急激に増え、紙質や印刷技術も向上し、本の装丁も以前とは比べ物にならないほど美しくなった。実に歓迎すべき変化である。これにはパソコンの普及とDTPの浸透が大きく影響していることは間違いない。もつとも、それと共に価格も上昇したが。しかし、皮肉なことに、この同じ事実が困った問題を惹起する。

元々バンガラデシュでは教育・研究施設への経費配分が限られていた。経済状況全般が改善されたからといって、こうした配分が急激に変化するわけではない。それだけでなく、他の産業の給与水準上昇に合わせて教育研究機関でも職員や教員の給与水準をある程度まで上昇させなければならなかった。そのため、出版点数は増えるのに、

図書館の蔵書はそれほど増えず、出版されても図書館では手にすることができない書籍の数が増えることになった。しかも、一度出版された書籍が、いつ重刷・重版されるのか、そもそもその可能性があるのかわからない。さらに、出版点数急増のせいなのか、以前のように広く文献をサーヴェイした研究は出なくなっている（ただし、どの書籍でも、以前と比べて巻末の参考文献一覧は懇切丁寧かつ包括的になっているから、文献リストに関してそれほど困ることはないが）。こうして、以前にも増して図書館はあてにできないようになった。

経済自由化に歩調を合わせるかのようにバンガラデシュでも私立大学が雨後の筍のように増えている。国立大学や他の私立大学との差別化を図るため、一部の大学は学生募集広告で「豊富な蔵書」を備えた図書館を売り物にしていくが、その「豊富な」の実態は、と注意してみると、ひっそり目立たぬように小文字で三〇〇〇冊とか五〇〇〇冊と記してある。これには啞然とするばかり。一度、ある有名私立大学の図書館をのぞいてみたが、それ以後、二度と足を向ける気にはならなかったと記せば、それがどのようなものか大体ご理解いただけよう。

仕方がないので、ダッカに行く度に書店や出版社を回っては、めばしい本をみつけるとすぐさま購入して手元に置くようにした。一度入手しそこねると、後で探そうと

してもなかなか難しいことがあるからだ。もともと、資金も蔵書スペースも限界が見えるようになり、他方、本の内容は似通ったものも多くなっている。最近では購入するペースを大幅に落としている。この時期に急激に成長したのが University Press Ltd という出版社で、特に英文の研究書や記録文書書籍化の分野で出版点数を急激に増やし、他の出版社を圧倒した。

パソコンとインターネットの普及は、出版だけでなく書籍の流通・販売にも大きな影響を及ぼしている。少なくとも一九九〇年代半ばまで、バングラデシュではインドなどで得られるような書籍の配送サービスはほぼ不可能だった。それゆえ、書籍を購入すると、買い手が自分で梱包し、それを郵送する手続きをしなければならなかった。ところが、一九九〇年代後半に入ると、一部の書店や書籍取り扱い業者が、買い手の注文に応じて書籍を探求し、郵送まで代行するサービスを始めたのである。これを可能にしたのがネットである。海外からもネットを通じて注文し、入手の可否を確認した上、ネット・バンキングで決済する。こうなるとバングラデシュ国外からでも提示されたリストを基に適当に見繕って注文することも可能である。

またこの分野は開拓途上だが、日本の研究者が多く利用するのは Rubi Enterprise だろう (<http://www.rubi.com/>)。ダッカのニュー・マーケットに店舗があるものの、

書店街とは離れた三階の奥に位置し、探すのは容易ではない。また、店舗に行っても大した品揃えがあるわけでもない。在庫を減らし、まさにオン・デマンド式で営業している。Bangladesh Yellowpages の HP には多数の書店等がリストアップされているが、その多くはさほど役に立つとは言えない (<http://www.bdyellowbook.com/catalog/>)。Grantha Mala はオン・ライン書店。ベンガル語が分かる人には良いサイトかもしれないが、個人的には利用していない (<http://www.granthamala.com/>)。

Rubi のような書店が台頭する一方、ニュー・マーケットの書店街は大きく変貌した。書店のいくつかは衣替えし、IT 関連技術のマニュアル本を中心に置くようになった。かつての名店 Book Syndicate はすっかり没落し、今では見る影もない。同店と並び社会科学関連では代表的な書店だった Mohindin & Sons は店主が引退した。晩年は店主の老化を反映して品揃えも低調だったが、店を新たに引き継いだ新店主が店名を AH Development Publishing House と変更して再出発してからは見違えるようになり、NGO や国際機関関連の報告書類の充実した店になっている。

最も変化したのは新聞雑誌である。バングラデシュの新聞雑誌といえは、紙質は最悪、すぐに虫食いだらけになるうえに、劣化も早い。また、海外への輸送手段が限られていたために、国外から注文、購読しよ

うとしても、それには限界があった。ところがネットの普及と共に、二〇〇〇年前後から多くの新聞雑誌がインターネット版を作成・公開するようになった。DTP のデータをほぼそのまま転用しているらしく、読むつもりならかなりの記事が読める。しかも、かつてはバングラデシュ国内にいてさえ難しかったバック・ナンバー購読も容易である。ネット上に載せている分だけの制約はあるが、ともあれリンクがあるバック・ナンバーは全て購読可能。しかも日本の新聞社のようにケチなことは言わず、全て「無料」なのである。おまけに、こちらがフォントを用意しなくとも、ベンガル語版でさえ読めるようになっていた。それらの全ての HP アドレスをここに提示することはスペースの制約上無理であるが、代わりに Bangladesh Net のアドレスを載せておくので、興味がある方はぜひアクセスしていただきたい (<http://www.Bangladesh.net/>)。トップ・ページにはバングラデシュで主要な新聞雑誌がロゴで掲示されており、それをクリックすると、すぐさまリンク先に接続できる。

(なお、国内でバングラデシュ関係の文献を見られる施設については、紙幅の都合上、省かざるを得なかった。)

(たかだ みねお／広島修道大学人文学部教授)